223
18

動物園案内

動物兒訓

特65
216

序

オヤ是りやア驚いた、獅子はどんな獣類かと思つてた、

窗磨粉のライオンは、よく自ら獣だつた、とは曾て上野動物園の檻の前で、或者が呟いた一言で、頗ぶる無教育を表し、笑話である、當今小學校の教育を受け居られる少年諸君は、ライオンの何物たるを知らぬ無教育者と、同日の論にあらずだが、併し百聞一見に若ずで、智識を開くには動物園の若き者を見て、研究するが必要であらう、本書は

其動物園の事情を、事實詳細微密、説明平易明瞭、書いたもので、少年諸君が日曜の遊歩や運動會の序、動物園に入るの必要なると同時に、また本書の必要なるは、實に云ふまでもない事である。

卅五年四月

常葉居主人

動物園案内

動物兒訓

沿革

淺田空花述

▲動物園は東京上野公園内、清水谷といふ所にあります、西北は丘陵に負ひ、東西には小さな水の流れがあつて、水陸の鳥や獸を飼養するには求めても容易くは得られない適當の地であります。

▲農商務省の博物局が、初めて茲に地を撰んで動物園を開

かうといふことになりましたのは、今から二十一年前即ち明治十四年であります、同年の十一月に初めて土木の工を起し、翌年の三月全く竣工りました。

▲工事の出來上ると同時に、今まで山下門の内にありました博物局の天産部といふ處に入れてあつた現在の動物を茲に移し、同月二十日から開園されたのであります。

▲開園後は外國の動物園から寄贈したもの、方々の方々から獻納したもの、動物園から購入れたもの等で、足ないもの、斃れたものを増し充たして居るのであります。

▲又た駱駝や馬や其他の戰利品動物は凡て清國及び臺灣の

產でありまして、何れも二十七八年役の時戰利して獻上したものを、この動物園にお預け或は御下附となつたものです。

▲只今は博物局といふのは有りませんから宮内省の直轄になつて居ります帝室博物館（東京上野公園にあるものを東京帝室博物館といひ、京都に在るものを京都帝室博物館といふ）の附屬となつて居ります。

▲只今の動物園の監督は帝國農科大學教授で理學博士の石川千代松氏、園の常務主任といふ資格で主として萬事に當つて居らるゝは宮内省技手黑川義太郎氏です。

▲別に事務員が二人、監視二人、蓄養者五人、園丁五人、掃除人二人、これ丈けが現時動物園の世話役であります。

收入

▲動物園は當初博物館の内の一部分となつて居ましたからこゝに要する費用なども凡て博物館から支出して居たのですが、近年は可成く動物園は動物園丈けの收入で費用の辨ずるといふ事になつて居ります。

▲扨て其收入といつた處で、唯だ見物人の入場料を徵する許りですから極々單純なものです、一日の入場者をザット三千人と見積り、其入場料大人は四錢小兒は二錢ですが平均三錢として九十圓、之れを一ヶ月に積ると二千七百圓となる譯です。

▲この内から役員の給料、新たな動物の購入れ、園内諸動物の餌食料、檻、室の修繕、新築費等を仕拂はねばならぬのです。

一日の飼料

▲動物園收容の動物に宛がふ一日の飼料は、金高にしますとザット二十五圓、一ヶ月平均七百五十圓です。

▲主な食料を申しますと、芋薯、豆腐糟、飴かす、胡蘿蔔、はや、蔬菜（小松菜、

キャベツ)、馬肉、泥鰌、魚の切身、林檎、食パン、蕷、干草、白米、玄米、籾米、稗、黍、米糠、小麥、大麥、荏、味噌、麻の實、鹽、牛乳、砂糖等、

▲これを一日の分量にしますと、

甘藷	三十貫目(一日分)	胡蘿蔔	六百目(同上)
飴糟	十五貫目(同上)	豆腐糟	十三貫目(同上)
林檎	三十目(同上)	菜葉	六貫目(同上)
魚の切身	五十目(但し一日置き)	食パン	十六斤(一日分)
馬肉	四貫八百目(一日分)	砂糖	四百目(同上)
味噌	百目(同上)	泥鰌	三貫目(同上)

食蕷	三百五十貫目(是は一ヶ月分)	稗	百貫目(同上)
蕷のふすま	三百二十貫目(同上)	白米	十五貫目(同上)
籾	二十貫目(同上)	干艸	八百斤(同上)
米糠	五貫目(同上)	麻の實	五百目(同上)
大麥	二十貫目(同上)	小麥	十貫目(同上)
荏	二貫目(同上)		

入場料と時間

▲入場料は　大人が四錢で小供が二錢です

▲休業日は　月曜日と年末の二十九、三十、三十一の三日間は休みで此外は元日でも祭日でも休みませ

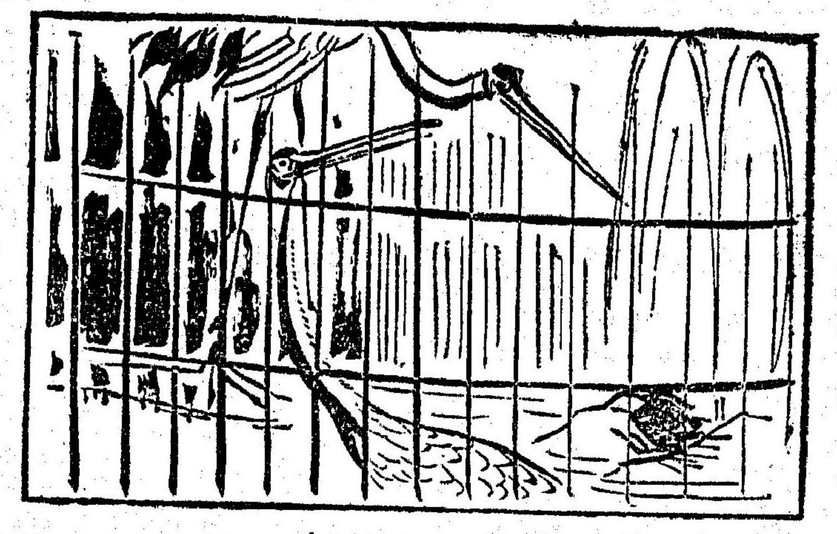
ん

▲時間は
一月と十一月と十二月は九時より四時まで
二月と十月は……八時より四時半まで
三月と九月は……八時より五時まで
四月と八月は……七時半より五時半まで
五月と六月と七月は…七時より六時まで
但し札は一時間前に賣るのを止めます

第壹號

『たんちやう』　丹頂　二羽

▲入口の關所を通ると、途が左と右と、前方の三つに岐れて居ますが、左にも右にも搆はず、ズン〳〵前の方にお出なさい、前といつた處で、眞ッ直ではありません、少しく左に折れて石段を降るのです。▲石段を降りた處が、即は ち第一號室で二坪許りの凹むた處に穹狀の鐵檻が圍つてあります、あたりには松、櫻、槐、楓などの樹が生ひ茂つて、檻の後方は一面に縞笹が厚い毛氈の樣に生ひかさなつて居



（うやちんた）

る、園中、最も景色のよろしい處であります。

▲茲に二羽の『たんちやう』が居ります、一は明治廿二年十二月に皇太子殿下から御下付になつたもの、一つは廿七年の十二月に同じく殿下から御下付になつたもの、朝鮮國の産です。

▲『たんちやう』、いふまでもなく、鶴の一種であります、普通に鶴といふは鶴を指したものですが、よく歌などに出て居る『たづ』、『まなづる』、『白鶴』などといろ〳〵の名を付せられて居るは、大概『たんちやう』を指したのです。

▲古歌に、『八千代へし雲ゐのつるの頂にあかねさしそへ朝日にはへり』といふがあります、丹頂といふ名稱は恐らくこの邊から來たのでせう。

▲鶴、即はち普通の鶴と違つた處は、頸のいたゞきに指で摘んだほどの赤味を帶て居るのと、足部が黑いのとこの二つが重の相違で、普通のものは頂に赤味がなく、足部が

瀟紫です。

▲總じて鶴は、動物學の分類上からは、涉禽類といつて鷺、鵠、千鳥、都鳥、などと同じ種類に屬して居ますが、其容姿の上品なると、羽並みの清かなと、性質のおとなしいと等に至つては如何なる鳥もかなはない。

▲のみならず、壽命の大層永い鳥だといひます、この點に於ては萬物の靈長といふ人間も遙かに及ばない、人間はいつも老少不定などといつて泣き悲しんで、鶴は千年、龜は萬年と唱へてその長生を羨んで居ります。

▲凡そ鳥の族で、この位の運のよい、果報者はありますまい、國家からは法律で捕獲を禁ぜられ、日本國中何處の邊陬にあつても獵師の銃先にふれる恐は更らにない、若し誤つて無斷に之を捕へた時は、すぐに罰金です。

▲或は歌によまれ、詩に吟ぜられ、美術家の筆に上つて高殿玉樓の床の間に愛重せられ、多くの風流人に涎を流さしむ、或は高砂の老翁老媼と並んで金蒔繪の島臺に上り、相生の松の綠、四海波しづかに、などとわい〳〵囃し立てられる。

▲加るに、禁苑、内裏に飼養はれて、天皇陛下、皇太子殿下を始め奉り、上々樣方の御座所近く飛び遊むでたえず大御心を慰め奉つて居る。

▲其外に古來から云ひふるした言葉に、鶴の一聲、鶴の巣籠りなどといふこともある、之れ等にはみないろ〳〵の意味があるが、要る處、鶴を尙び之を敬ふの意味を洩らすのに變りはありません。

▲動物園には玆に在る外、別に十五六羽の『たんちやう』が、そこ〳〵に置てある、其中には外國產のものもあるが、これらは凡て後の方に說明しませう。

▲『たんちやう』の食餌は、泥鰌が主なもので一羽一日の量が百五十目、之れに籾、混菜類を與へるので大抵二食と定めてある。

第貳號

『をかめいんこ』　鸚哥　二番

▲『たんちやう』の鐵檻を左に見て石段を上つて、突當つた處が第二號室だ、『をかめいんこ』が四羽、頰べたを赤くして枯れた棲木の間を面白さうに飛び交はつて居ります。

▲『をかめいんこ』は動物學上、攀木類の一種である、吐血鳥、啄木鳥、鸚鵡、なぞ〳〵親類です、この種類は凡そ百六十種もありますが、其特徵に嘴の尖が下方に曲つて居るのと、足趾の爪が同じく下方に曲つて居つて樹木に攀ぢ登

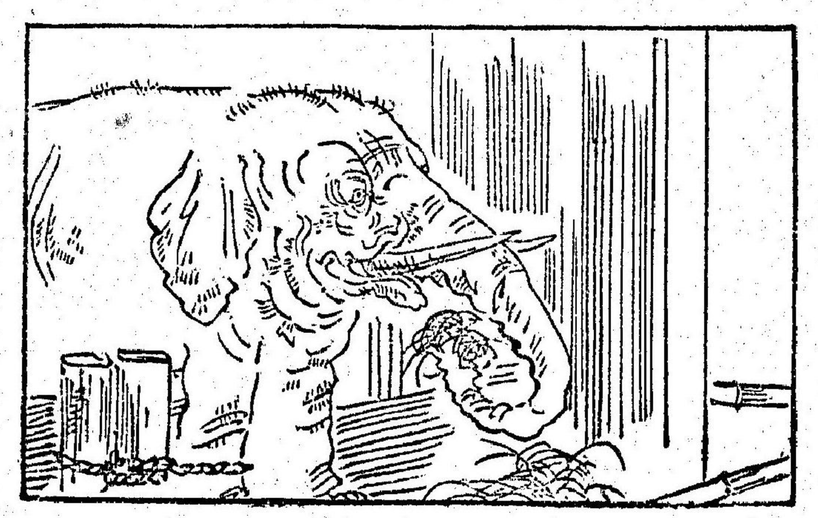
るに便利な生れ付きを持つて居ることであります。

▲森や林の中ではこの嘴と、足趾で自由自在に樹木に喰付て木皮の間の虫を啄ばむのだが、この動物園では二六時中黍、麻の實、荏等のご馳走になるのです。

＊　＊　＊　＊　＊

▲こゝから左に隣つて『閑々亭』といふのがある、誰でも這入てお休みゞ勝手、但し茶と、お茶受の用意はありません。

▲閑々亭の前を通り越して左に石段を降りて右に曲がる、この間が凡そ半丁餘り二つの木橋を越すと、茲に第三號室がある。



第參號

ざう　象　牡一頭

▲これは明治二十一年五月、暹羅の國王から寄贈されたもので、歳は本年廿九才。

▲動物園では朝夕二食で、體軀が大きい丈けに、終日鐵鎖につながつて、ぬらりくらりして居ても、却々大食をする。

▲先、生の甘薯が十貫目、食藁が七貫五百目、干草が三貫目、それに砂糖を毎日四百目つゝ喰ひ、これが一日二度分の食料です。

▲動物を大體に別つて有脊動物、節足動物、腔腸動物、被嚢動物などゝ丸つに分ち、其中で又たいろ〳〵に分れて居ますが、『象』は有脊動物の中の、哺乳類の長鼻類といふ部類に屬して居るのです。

▲先に説明した『たんちやう』『おかめいんこ』などの鳥類も矢張り有脊動物の部に這入つて居るが、これは哺乳動物ではないのです。

▲有脊動物の中の哺乳動物といふは人間も同じくこれで、其他猿、馬、牛等の脊骨のある動物で、親の腹から生れ、乳を飲むで育ち、肺の臓で呼吸をして其血の温かなものを云ふのです。

▲有脊動物のこの哺乳類を動物學上高等動物と唱へて居ります。

▲世界中で一番大きい動物は何かと問はれた時は、誰でも象だとお答へになります。昔の昔の大昔には西比利亞に『まんもす』、北亞米利加に『ますとどん』といふ象に能く似て、象よりも遙かに大きい獸が居たそうですが、夫れは今では

絶えてしまひました。

▲象の種類は印度象、亞弗利加象の二種のみで、印度象は主に印度地方に居り、亞米利加象は主に亞米利加に住むで居る。

▲こゝに餌はれて居るのは印度象の方で、ご覽の如く頭は少し長き方、耳は普通で、牙は短く、鼻も亞非利加産より短い、亞弗利加産の方は頭が圓く、耳が太く、力も強いのです。

▲象の牙は即はち象牙といつて簪、箸、ナイフの鞘、櫛、其外いろ〳〵の細工物に使はれて居る需要の廣いもの、鼻

は自由自在に伸ばしたり縮めたりすることの出來るやう軟かい筋肉から成り立つて居る。

▲普通の動物は前脚や、口の尖で萬事の自由を足して居るのですが、象はご覽の如く全體が大兵に出來て居るから前脚を動かしたり、口尖を働かすことは容易でない、其處でこの樣な便利な鼻が與へられて不自由のない樣に造てあるのでせう。

▲能く注意して見ると、この鼻の尖の穴の眞中に指の樣な瘤の樣なものがある、この瘤が非常の働きをするので、物を喰ふ時重い材木を持つ時、小さな針を拾ふ時、紐を結ぶ

時一切萬事なか〳〵巧みな藝をする。

▲この鼻ばかりでも四五貫目はあります、體軀全體の重さは百貫目から二百貫目、稀れには五六百貫目に上つて居るものもある、この非常に重い大きな體軀を持て居るのですから、のろまといへば隨分のろまの處もあるが、氣質は誠に愛らしい、溫和な獸で、夫れでなか〳〵智慧ある、利巧な處がある。

▲印度邊では鐵道の鐵軌を運んだり、石垣を積んだりするには大抵この象を使ふのです、そして牛や馬を使ふのとは違ひ側に人が居なくとも、今日の仕事はこれ〳〵、これを

斯うするのだ、と教へて置けば、後は搆はず打捨つて置いても、ちやんと其れ丈けの仕事をする、其遣り口が如何にも獸とは思はれぬ位だそうです。

▲鐵道の工事や、土木工事や、これらの用に供せらるゝ外に、戰爭の時にも隨分有用な働をする、印度政廳では之れが爲めに特別に役所が設けてあつて象の保護取締をして大事にして居るのです。

▲何方かといへば今日では印度よりも亞弗利加の方に澤山住むで居る、最もコンゴー河畔、即はち中央亞弗利加に多い、地中海に臨むだ北アフリカや、一昨年來から英國と戰

爭をして居る、南アフリカ地方には近來餘り見當らないそうです。

▲コンゴー河の附近では何時も五十頭乃至數百頭の象が、群集して食物を求めつゝ、附近村落の土民が汗水を流して耕した田畑を荒らすので、處によると五六十里四方全く土民の住せざる所が澤山ある。

▲象は互に相助け合ふ精神が自然に發達して居る獸であるから、一頭や二頭で、自分の在所を離れて遠く徘徊する樣なことはありません、必らず三頭以上多くは二三百頭が打連れて遠足を試むるのだ。

▲その内でも一番強く大きく、一隊中の精鋭ともいふべきものが、前後左右を取り圍むで、仔象や、弱い者や、負傷でもした者は眞中に入れて、何時でも不意の攻撃に備へて居る。

▲其有樣が如何にも軍隊的であるから、進行で居るうちは、之に手向ふことは容易でない、行き疲れて何處かに憩む時か、或は其目的地に達して打寛いで遊び戯れて居る時、獵師に不意をうたれるのです。

▲その外に象はしば〳〵水を飲みに濕澤若くは川邊にのそのそ出かけて來る無論一頭ではないが、進行して居る時は

どには密接してゐない、此機をはづさず岩蔭なり、木の蔭なりから覘を定めてズドンと一發放つのです。

▲象の急所は先づ額で、其次が目と耳との間の凡そ四吋ばかりの處、其次が耳の後側です、人によりては心臓を覘ふものもあるが、夫れよりも頭部を目掛ける方が安全だといひます。

▲覘を定めるが一番困るのは、象は全体滅多に廣々した野原に出ない、何時も森から森を傳ひ、熱帯地方特有の雑草の間に起伏して居るから、この中を象に悟られず甘く忍びこむことが餘程の骨である。

▲骨が折れるが充分に覘を定めるには何うしても十五六間乃至二十間位の處まで近付かねばなりません、この距離に近付くは近付ても象の様子から自分の姿勢を定めるなどで却々十分の機が見付らない、時によると四時間も五時間も目の前に象を見ながら空しく立すくまねばならぬ事が度々ある。

▲思ひ切つて發銃した時、まご〳〵して象に見付かるとも生命がありません、銃の響を聞きつけて其處ら一面に散在して居た象は元の如く一隊となつて逃げ出す、逃げ出す方角にでもブツ付からうものなら忽ち脳天から蹂躙られて

仕舞ふのです。

▲象が其牙を鳴らし、其鼻を振り翳して烈火の如くに怒つた時は何んなに凄いのでせう、日本にはありませんが、西洋の探險家はしば〳〵麼ういふ目に遭ひ、之に關していろいろ面白い話しの書いたものもあります。

第四號

『しやう』　獐　牝一頭

▲象の一棟から左手に横に長く設けてあるのが此四號室です。

▲鐵柵で圍つてある左手の初めに居るのが『しやう』といふ鹿に似た獸です、朝鮮の産で日本には居りません。

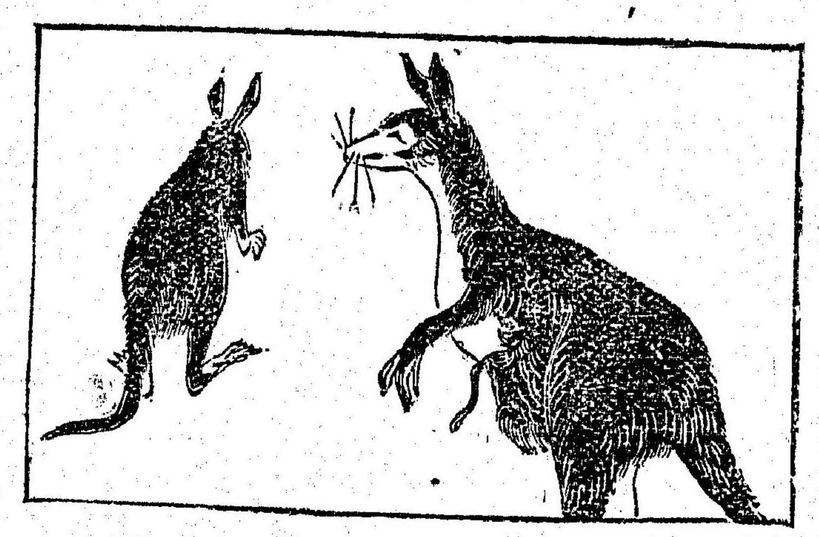
▲麝香獸の一種で、明治卅四年摺澤敏といふ人の獻納したもの、食物は黍、干艸。

▲麝香獸は反芻偶蹄類のうちに屬して居ります。

『おんがるー』　牡　牝　一番

▲これは熱帶の動物ですから、無論日本には居りません、頭部から體軀の工合は兎に似て居ります、又た前足が短かく後脚が長く前方に屈折した處も兎に似た所があります。

▲しかし兎とは全く別物で無胎盤哺乳類の有袋類、即ち



(一るがんか)

袋鼠や狼などと同じ種類に屬して居ります。

▲その後脚を折り曲げた儘、歩く風付は餘り感心した見ではありません、大さは普通の鹿に比べて小い方、尻尾は體軀の割には不釣合なほど長くて大きい。

▲朝起ると二時間も三時

間も牡が牝を追かけ廻はしてさんざんに疲れ、開館時刻ごろから日が暮れるまでのたり〳〵寢くたばつて許りゐます何となしに厭味な獸だといふ感じがします、少年諸君などは永く見て居る處ではありません。

▲これは三十三年六月に濠太利メルボンの動物園から寄贈して來たもの。

▲食物は大麥のを飽くほど、干草を適宜、其外に生芋を與へるのです。

『四不像』　牝　一頭

▲『かんがるー』の直ぐ隣に居る、これも甚だ不思議の樣子

をして居ります。

▲矢張り鹿族の一種で滿洲（清國北部）地方に棲息して居る、子爵榎本武揚氏が清國全權公使であつた時、その頃清國の靈囿に養ふて居たものを懇望され、過る明治二十一年支那政府から、我が宮内省へ牡牝二頭を贈つて來ました。

▲この二頭の間に出來たものが今居る四不像で、二十三年四月にこの動物園で生れたのです、親二頭の内、牡は三十一年十月に、牡は二十九年七月に死んで仕舞ひました。

▲頭部は鹿の樣でもあれば又た駱駝に似て居る處もある、脚は牝牛に似て、尾は驢馬に類して居るといふ處から四不

像と名付けのただそうです。

▲其大きさは略驢馬位ゐでせう。

▲豆腐滓、飴かすに生芋薯を刻み込むたもの、夫れに干艸、これ丈けが餌食です。

※　※　※　※　※

▲この一棟の動物を見て仕舞へば、之れより途を右手にとり一段高くなつた廣場に出て、一番右手の室から漸次に左手に移るが順路です。

▲この並びもすべて第四號の部に屬して居ります。

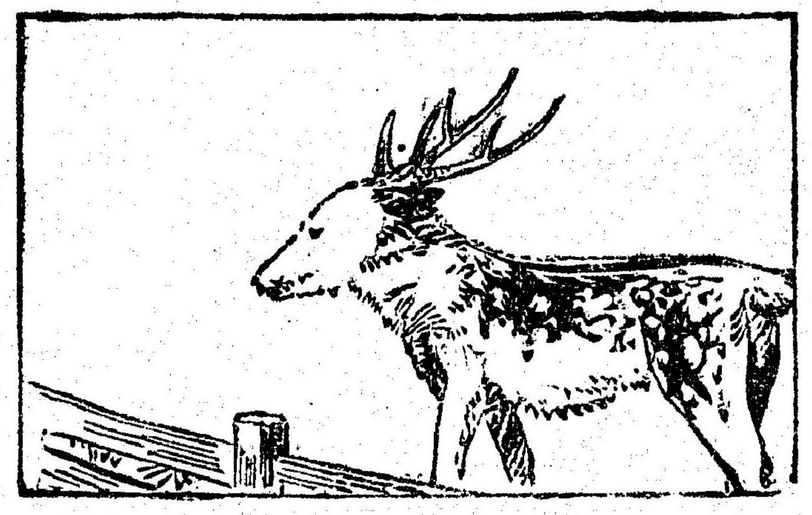
『野猪』　二頭

▲一頭は豚大のもの、臺灣から生捕つたもので陸軍歩兵大佐池田正介氏の獻納、今一つは犢中大です、何時も藁の上にしだらなく伏し轉んでうん〳〵呻つて居る。

▲食餌は同じく豆腐のかすに生芋薯を切込むものです、

『スインホー氏の鹿』　二頭

▲スインホーといふ動物學者が見付けた鹿の族です、臺灣の産で、明治三十一年六月に陸軍少將比志島義輝氏が持歸り獻納したるもの、驢馬位ゐの大きさだ、總じて臺灣生れの鹿は内地のものよりも大きい樣です。

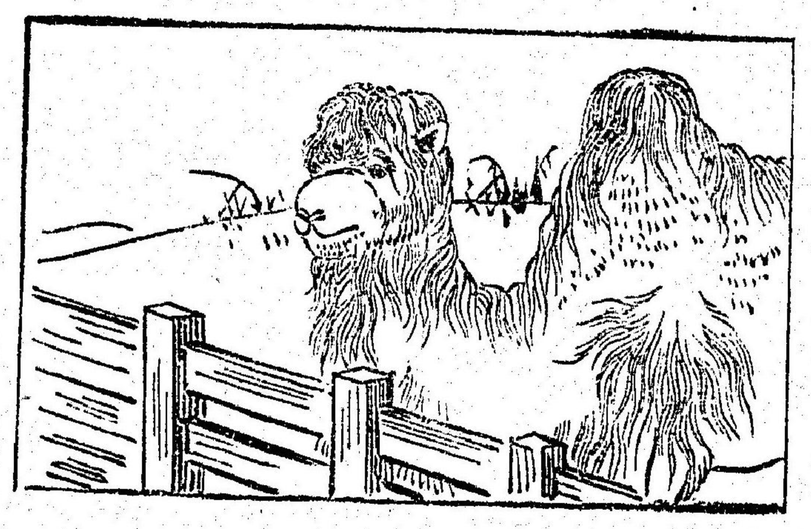


『鹿』　一頭

▲これは明治二十九年の二月に侯爵伊藤博文氏が同じく臺灣から持ち歸られたもの。

『家猪』　二頭

▲日清戰爭の時、支那の安東縣附近にて捕獲したるもの、明治廿七年十二月侍從武官中村覺氏の携（か し）



(だくら)

へ歸れる所なり。

『らくだ』駱駝四頭

▲日清戰爭の時、第二軍が捕獲したものです、支那の軍隊で輜重用に使つたものだといひます、第一師團長故山地元治氏の獻納されたもの、天皇陛下は之を東宮殿下に賜はり、東宮殿下よりこの

動物園に御下げ渡しになつたものです。

▲何れも其背上に二個の瘤がある所から『兩峰駝』と名けてあります、背の上に恰かも小さな小丘が突起して居るのです。

▲この二ッの瘤の間に人が乘ることも出來れば、荷物を載せることも出來る、久しく渴きに堪へ熱さを堪へる力が強いから亞弗利加の沙漠などを旅行する時は吃度この駱駝を用ふる。

▲前に反芻偶蹄類といふことをいひましたが、駱駝も矢張りこの種類に屬するもので、鹿、牛、羊なども同樣です、近

所の牛乳を搾る處へ行つて御覽なさると直ぐに分ります、大きな牛が日あたりの善い草の上か何にかに寢ころんで、目を細くしながら口をもぐ〳〵たえず動かして居るのを注意して御覽なさい。

▲其處らに食餌らしいものは一もないのに、始終もぐ〳〵口を動かして居る、全體牛は何をして居るのだ、何を食て居るのだといふ疑ひが起るでせう、このもぐ〳〵やつて居るのが反芻偶蹄類の特徴です。

▲これは全く胃の腐の工合が外の動物と異つて居るからでこの種類の動物の胃は四つの房に分れて第一房は食道から

直ぐに開て居るもの之を瘤胃と名け、之れと並んで居る第二房を蜂の巣胃、第三を重瓣胃、第四を皺胃といひます。

▲先づ食べたものは食道から直ぐに瘤胃に入り、茲にて善い加減に濕りを受けた後蜂巣胃に送られ、この蜂巣胃から再び食道を通つて何時でも都合のよろしい時口に戻つて來る、戻つて來たものを嚙み直して重瓣胃に送り、茲にて一通り消化された上、更に皺胃にゆき、夫れから腸の方へ送られるのです。

▲即はちこの蜂巣胃の中へ餌食を這入る丈け貯へて置て空腹なつた時、ゆつくり口に跡戻をさせて、むしや〳〵やる

ので、一度お腹に入れたものを又出して食ふから反芻といふのです。

▲何故こんな工合に胃の組織が違ふかといひますと、獅子や虎や狼などの住んで居る山の中に居ますと、これらの猛獣から何時も脅かされて、ゆつくり食物を取る事が出來ない、まご〳〵して見付かると自身の命まで取て食はれる心配がありますから、機を見計つて少しの間に手取早く詰め込まねばなりません、其處で自然に餌にありついた時は大急で詰め込み家へ歸つてから、ゆつくり食ふことの出來るやうに造られたのです。

▲偶蹄といふことは後の馬の處で説明しませう。

▲動物園では駱駝は小麥のふすま、大麥、干艸などを食て居ります。

『ミユール』　二頭

▲これは第三師團長（日清戰爭の時の）桂太郎子即はち今の總理大臣が獻納されたもの、廿七八年役の時、柳樹屯に駐屯してをられました福原陸軍少將から送て來たものです。

▲一つは其名を旅順といひ、一つは營口といひますが營口丈けで旅順の方は居ません。

▲『ミユール』といふのは主に亞米利加の大陸や支那の大陸

に產するもので、驢馬と普通の馬との雜種です。

▲乘用には不向の方ですが、頸の力が非常に强いところから歐米大陸の軍隊では輜重用に大抵このミュールを使つて居ります。

▲去る三十二年の頃比律賓で、西班牙と米國との戰爭があつた時、米國から運送船に積んで一時に五百頭から三百頭位づゝ送つて來て、二三日神戸に上陸さして中休をさせたことが度々ありました。

『驢馬』　二頭

▲同じく大連灣にて捕へたるもの、宇品運輸通信支部員海

軍大尉松村龍雄氏の獻納にかゝる。何時も口をもがゞさせて、足をがた〳〵動かして居る。

▲支那では駄馬用には大抵之を使つて居ります、米國の畑を耕すものも大抵是れで、日本にも近來手輕な馬車には驢を使つて居ります。

▲四號の部は右にてお仕舞ひ、この廣つ場を後ろに引返して竹埒傳ひに階段を下ると眞直ぐ右手に煉瓦造りの一棟がある、こゝが第五號室であります。

第五號

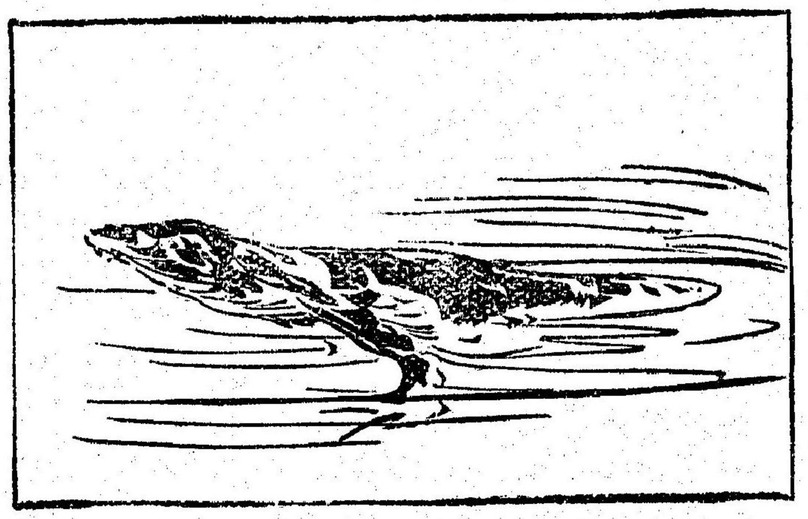
『さんせうを』　鯢魚

『きんぎよ』　金魚

『ふな』　鮒

▲金魚、鮒のことはいふまでもないのですが、『さんせうを』に就ては少し説明して置かねばなりません。變な形をして居りますが、これは外國にも餘り見當らないものですから、動物學者は大層珍重して居るものです。

▲全體この『さんせうを』といふのは蛙の親類續きです。



(をうせんさ)

▲蛙の種類にも種々ありまして、指趾の末端が尖つて居るのを尖指類といひます、『とのさまがへる』、『わかがへる』、『つちかへる』はこの中に屬し、指の尖が圓く平板くなつて居るのを盤指類といひ『あまがへる』の如きは之れに屬して居ります。

▲それから同じ蛙の類でも舌のないものがある、之を無舌類といひますが日本にはこの種の蛙は居りません、主に南亞米利加の方に居るそうです。

▲以上舌の無いもの、指尖の圓いもの、指尖の尖つたもの、この三ッを總稱めて無尾類といひます、即はち何れも尾の無い蛙をいふので、小い時は『おたまじやくし』といつて鰓で呼吸をしますが、成長して來ると鰓がなくなり新に肺が出來て、之れで大氣を呼吸するのです。

▲夫れから尾のある蛙が居ります、之れが即はち『さんせうを』です、蠑螈も同じくこれと同じ種類に屬して居ります

すが、只『いもり』と變つた處は、『いもり』は普通の蛙と同じく、成長した時は鰓がなくなつて肺ばかりで呼吸をするのですが、『さんせうを』は三對の鰓と肺と大抵兩方を供へて居るのです。

▲其處でこの『さんせうを』の類を蛙の中の有尾類の魚形類といひます、日本で産するものは、この『さんせうを』ばかりです。

▲まだ外に丸で足のない蛙も居りますが、之れは南亞米利加、印度、さいろん等の熱帶に住して居て無論日本には見付かつた事は有りません。

▲『ひさかへる』、『いもり』、『さんせうを』これ等を動物學上では又た兩棲類といつて居ります、水でも地上でも生息して居ることが出來るのです。

※　※　※　※　※

▲第六號室は只今何にも居りません。

第七號

『きつね』　狐　一疋

▲右の水族室を出で其横手を廻はると先に這入つた水族室の入口と向ひ合せになつて第七號室が横に長く並むで居ります。

ます。

▲其第一番に控へて居るのが『きつね』です、明治三十二年十二月伊藤博文侯の獻納せしもの、毎日馬肉と、ふかし芋のご馳走になつて居るから、お稲荷樣の油揚や赤飯をせしむる苦勞もなく、圓々肥えふとつて居ります。

▲所謂狐色の毛が日の光りに映じて澤々しく光りを以て居るところ、鼻毛を延ばして妙にすまして居るところなど精はしく見て居ると、なかゝ趣きがあります。

『あなぐま』　貉　牝牡　二頭

▲一つは茨城縣下にて捕たるもの大脇斌をいふ人の獻納、

他は駿河の山奥で生捕つたものです。

▲歩掌類に屬するもの、普通の猫の二つがけ程の大きさ、四趾は非常に短く、豚の仔のやうに圓々肥えふとつて居ります。

『きやう』　猿　牡一頭

▲廿九年一月皇太子殿下より御下附、臺灣産、原名をムンチャックといひます、豆腐かす、胡羅蔔、生芋等を喰ふ。

▲鹿族の一種です。

『サンマーの一種』　二疋

▲即はち山猫の一種、清國山東省の産、二十五年の十二月

久米三郎といふ人の獻納せるもの、別に米國産のものが一緒に居ります、これはドクトル、エルドリッチといふ人の寄贈にかゝる。

▲前の貓はどの大さで、黑い毛並の間を縱にまだらに白色がまざつて居ます、雉子猫の黑い奴と思へば間違ひはありません。眞ッ黑の眼玉をキロ〳〵さして居る處は悚い樣です。

『ウオムバット』

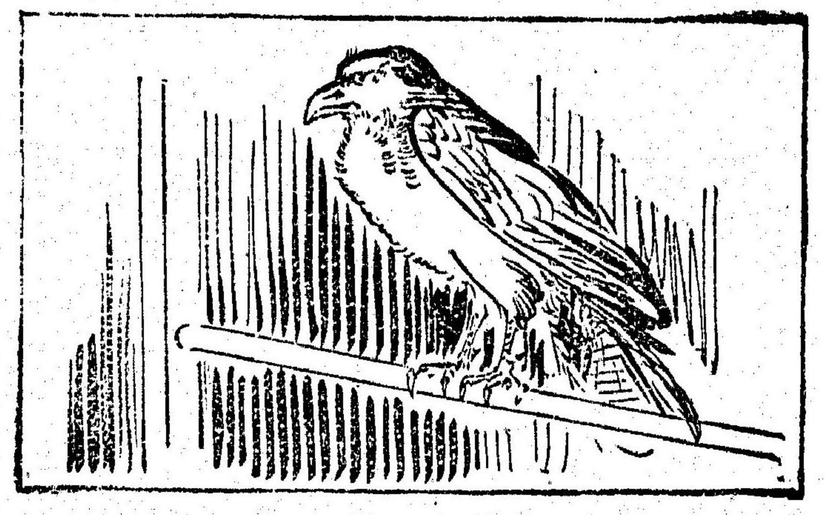
▲濠太利メルボン動物園から寄越したもの、大麥混菜（胡羅蔔、キャベッ等）を食餌とする。

▲頭大、体肥えふとり、耳短く脚長し、前の『かんがるー』と同種類の有袋類に屬して居ります。

『もゝいろいんこ』　鸚哥　四羽

▲濠太利の産、メルボン動物園から寄贈したもの『いんこ』の類では一番大きいものです、翼、羽毛の全體は眞白の雪を戴いて居るかのやう、お頭の頂邊に小さな一攫の毛が隆出して居る、この隆出した毛が桃色になつて居ります。

▲この『もゝいろいんこ』と一つの部屋に仲よく棲木に遊び戯れて居るのが『きばたん』といふ鳥、これも矢張『いんこ』の種類です、一寸見た所は鳩に似て居ります。



（しゐ）

『おほわし』　鷲　三羽

▲一つは明治卅一年四月に渡邊兵治郎といふ人から獻納したもの、筑波山中の産、他は卅一年五月に福井菊二郎氏から、今一つは卅一年八月に山本又三郎氏から獻納したもの、何れも北海道の産であります。

▲鷲が猛禽類に屬して居ることは後にかいてある通り、禽類中の最大、最強のもの、巣は高い山の險しい絶壁の上に造ります。

▲餌食は鳥でありながら獸を主に好みます、雀や、燕などの小鳥には眼も呉れず、兎や猿などを突差り引攫んで食ふのです、それも自分の取つたものでなければ承知しません、見識の高いといつたら又恐らく鳥類中の第一等でせう。

▲時としてこの餌食にあり付かぬ時は、人家近くに遣つて來て、庭先の筵の上などに寢かしてある赤ン坊を引攫つて行つたことも度々ありました。

▲人の赤ん坊は何とも思ひませんが、自身の雛ッ子となると、それは〳〵大事にして育てます、自分は餓死にをしても決して雛ッ子に餓じい目をさせない。

▲或る獵師が其巣を見付けて、親鳥の留守の間に巣の儘、我家へ持つて歸つて屋根上に置いた處が、親鳥の鷲は方々探し歩いた後、やッと其在所を見付け、毎日々々こゝ迄兎や羊を運んで來て雛ッ子をいたはつて遣つたそうです。

▲動物園では馬の肉一羽に付き一日八十目づゝご馳走になつて居ります。

『いぬわし』　狗鷲　一羽

▲同じ鷲の種類でも、『おほわし』に比べますと、ずつと弱く、體も小さうございます。自然食物も『おほわし』よりは少ない、これは信濃の産で三十三年五月原田伊勢松氏の獻納です。

『くまたか』　角鷹　一羽

▲『くまたか』は鷹のうちの大將です、これは田中平八氏が三十三年五月に獻納したもの、日本、印度、亞細亞、亞米利加、亞弗利加何處にでも居ります。

▲鷲ほどには猛々しくはありませんか、鷲を除けば強いと

と勇ましいことに於ては鳥類の如何なものも及びません。

▲又た眼の力の強いことは鳥類中の第一等です、一里先きの小さな兎でも直ぐに見付ける、飛ぶことも非常に速い、一時間に三十里位はたやすく翔ける、全速力で翔んだら五六十里位も行くでせう。

▲この眼で始終空中を飛び廻はつて遙かの上から其所らに飛舞つて居る馬を襲ふて餌食にする、雀、雲雀などの小禽類はこの鳥の姿を見るとぶる〳〵もので直ぐに小さくなつて仕舞ふのです。

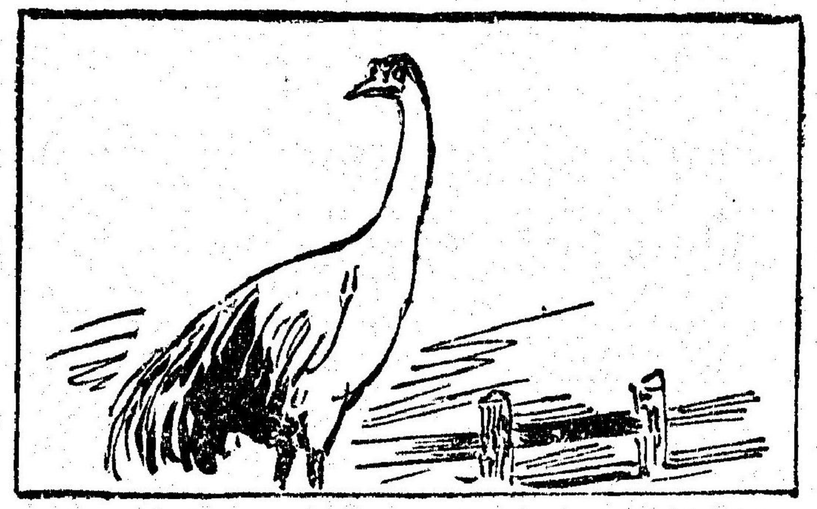
▲この眼と、この飛ぶ力と、この勢力を持つて居るのです

から、この鳥を能く飼ひ馴らして徳川時代の將軍方の小禽の狩に使はれました、この狩を鷹野といひ、之の鷹を使ふ役目を鷹匠といひました。

▲西洋でも之に能く似たことをして今日でも鷹を飼ひ馴らして居るものが澤山あります。

▲鷹の種類は大層多く、蛇を喜んで喰ふものもあり、蜜蜂のやうに少さな虫をいじめるものもあり、鳧を捕へたり、泥鰌を引攫へたりして空中高く舞上がつて、ひろ〳〵した下界を眼下に見下しながらお馳走を喰ふのです。

『ひくひどり』　食火鶏　一羽



（ひくひどり）

▲この鳥は火を喰ひますから食火鶏の名があるので矢張走禽類の一種です體は鶴大、其の格好は頸の短かい駄鳥といふ風です。

▲茲では生肉（馬）、ふかしいも、を食つて居ります、明治三十年十月侯爵鍋島直大氏から獻納され

たもの、濠太利の産です、日本には居ません。

『くまたか』　角鷹　一羽

▲これは磐手縣下の産、三十五年二月に臺灣民政長官後藤新平氏から獻納したもの。

『きじ』　雉子　一羽

▲この鳥も却々子思ひの鳥です、蛇の御馳走を好みますが、茲では黍、芋を食はされて居ます。

『しまふくろふ』　一羽

▲梟の一種、これも鷲、鷹と同じく猛禽類に屬して居りまして、視力が餘り強過ぎるので日中は善く見えませんが、夜

（ふろくふまし）

分になると我れ獨りといふ樣に、大威張で自分の在所を出で他の鳥類の熟睡して居る所を襲ふて餌にあり付くのです。

▲梟のことで思ひ出した面白いお話しがありますから茲で一寸手短かにお話しませう。

※　※　※　※

むかし〳〵、さる處に一人の聖者がありました、所々方々を經めぐつて有難い道を傳へひろめることを仕事として お出でした。

或日のこと、いつもの樣に諸々方々をめぐり歩いた揚句もう夕方になつて來て足も疲ぶれ、その上お腹が空つて來たものですから何うする事も出來ません。ふと其處らを見廻はすと一軒の菓子屋が見付かりました。

この菓子屋に這入つて『何んでもよろしい、お腹が減つて堪らないから、一つ惠むで貰ひたいものだ』と施しを乞はれました、お金を持てお出でにならなかつたと見えます。處が店のお神さんは『乞食に呉れる樣な菓子はないぞ』といふ風で見向きもしません、サッサ〳〵とお菓子を燒てをります。

『何うかお邪魔でも一つ惠で貰ひたい』、たび〳〵戸口から乞はれるものですから、お神さんは小しムッとして『うるさいヨー、今に燒てあげるよ』といつて、仕方がないといふ風で、小しばかりの麥粉を丸めて火の上に撒けましたが、サテ燒て見ると惜しくッて人に呉れる氣になりません『只で人に遣るにはこれでも大きい、この半分で澤山だ』と呟きながら、其半分ほどの粉を丸めて又火の

上に置きました、燒て見ると、矢張り惜しい氣がして吳れる氣になりません、『これでも大きい』といひながら棚の上に仕舞ひこんでしまひました。

今度は其半分の半分ほど燒いて見ましたが、矢張り惜しくて堪りません、『自分に食べるには小さくて仕方がないが、人に遣るにはまだ大きい』といつてこれも棚に仕舞込んだ。

初めからこの有樣をご覽になつて居た聖人も、もう默つて見て居る譯には行きません、非常にお怒りあそばして『爾の樣な貪慾なものが人間の形をしてこんな立派な家

に住み、斯樣な衣服を纏ふて、かゝる火に溫まり居るは人間の面汚しだ。今から鳥の種類となつて、空に鳴き、草に眠り、木の上に棲んで虫けらでも取つて食へ』との言葉がまた了らぬうちに、このお神さんは見る〳〵羽がはへ、眼玉がぎよろ〳〵光つて來て、烟突の口から飛んで出で、遙の彼方の森の中へ隱れてしまいました。

これから毎晩〳〵ホツホー、ホツホーと悲しさうに鳴てこの世を暮らす事になりましたとさ。

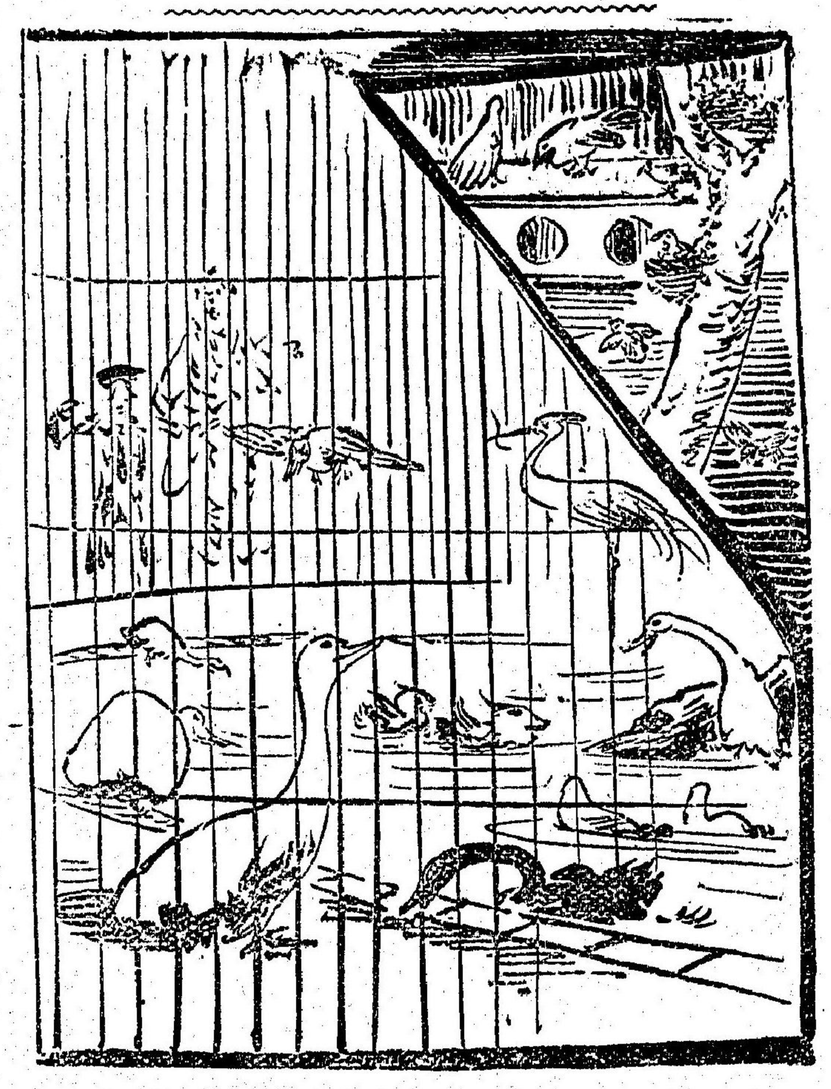
『をじろわし』　二羽

▲三十年六月佐藤安之助、齋藤今次郎の二氏より納めたるもの、名の如く尾の色の白い鷲です。

第八號

鳥の話

▲第八號室は第六號、七號、九號、十三號、の諸室に取りまかれて居る中央穹狀の大きな鐵檻をいふので、この周圍には脚子、木の根などが特別に設けてお休みがてら見ることの出來るやうになつて居ります。主に水禽類が入れて有



ります。

▲單に水禽類といつてもお解りにならん方もありませう、茲で暫く脚子にでも腰を下して鳥に關する大體のお話しをザット申上げることにしませう。

▲鳥類が他の動物と違つて一番著るしい事は、空中を自由自在に飛び翔ることです、人間は這ふことも泳ぐことも木登りすることも出來ますが、鳥の樣に飛び翔けることは出來ません。

▲西洋の學者でデユモントといふ人、近來熱心に空中飛行器の研究に身を委ね、餘程進んだ機械を發明して、この間

ハイド公園(英國)の上を飛び廻はつて見たそうですが、從來の輕氣球とは全るで別の仕掛になつて居つて五六人も乘れる、柁が甘くとれるそうですが、この飛行器が今一層進歩しましたら、鳥にもまけず自由自在に空中の探險を試むることが出來るでせう、が皆樣方が瀛車や電車に乘るやうに容易に飛び乘つて方々を翔け歩く樣になるのは未だ〳〵容易ではありません。

▲空中飛行器のことに就ては是れまでいろ〳〵の本などに出て居りまして、この飛行器に乘つて無人島に行きいろいろの目に逢つたなど、面白いお話しもありますが、實際

人の乘れるものを作くる樣になつたのはつい二三年前からの事です。

▲併しいくら智慧が進んで空中に旅をする事が出來る樣になつたとて、迚も鳥の眞似は出來ません、鳥の樣に手輕に譯もなく苦もなく飛翔けることは人間業では出來ッコはありません。

▲鳥に特有の羽や翼の軸即はち中骨には大きな所は無論の事、小さな羽の隅々まで中が洞虛になつて氣竅といふのが開いて居ります。

▲人間や其外の獸の肺の臟には其下に横隔膜といふ膜でも

つて固く仕切をしてありますからいくら澤山の空氣を吹込まうとしても、肺の大きさ程より外には這入らなのですが鳥のこの膜には小さな穴が幾つも明いて居りますから、體軀中一ぱいに空氣を吸込む事が出來る。

▲この吸込むだ空氣は體軀の隅々に及んで、骨や羽の氣竅に充ちて來る、そうなると體軀は非常の輕さになつて、殆むど羽をのばさなくとも、ふは〳〵浮て來る樣になるのです。

▲この外に殊に鳥のうちでも輕く飛揚するものは胸の骨の構造も余程變はつて居ます、大抵胸骨大きく胸の筋肉が之

に付着して居りますが、能く飛揚するものは、尙は其上にこの骨の中央が隆起して居ります。

▲この胸の骨の隆起があるものと無いものとに分けて凡の鳥類を無胸起類、有胸起類の二つに分けてあります。

▲無胸起類は前翅が充分に發達せずして多く飛揚の用を爲さず、後趾は其代りに強く大きくなり、胸骨は飛翔しませんから全く隆起することなく、又骨の內には氣竅が有りません。

▲駝鳥、にうじいらんど產のぎうい鳥等はこの種類に屬して居ります。

▲有胸起類は七通に分れて居ります。

一、水禽類　鵜、雁、鳧、家鴨、鴨、阿呆鳥等です（特徵は後肢短くして體の後端に近く位し趾間に蹼あり）

二、涉禽類　丹頂、白鷺、鵠、鶴、千鳥、都鳥等です（特徵は頸、嘴、及後肢極めて長し）

三、鶉鷄類　雉子、鷄、鶉、孔雀、等です（特徵は體は短く翼も概して長からず嘴は鋭く其尖端少しく下曲し歩行は強し粗拙なる巢を地上に造る）

四、鳩鴿類　ハト、キジバト（特徵は基部柔軟にして鼻孔の周圍膨脹し翼尖りて後肢短く歩行の際後足を地に

着けず胸骨の隆起殊に著るし）

五、攀木類　時鳥、啄木鳥、鸚鵡、鸚哥の類です（特徴は嘴鋭く羽毛は剛く、後肢に四本の趾あり二本は前に向ひ二本は後に向ふ）

六、燕雀類　雀、山雀、燕、鶯、時食雀、繡眼兒、等です（特徴は嘴角質にして歩行或は攀木肢を具へ多くは鳴管を有す、樹上に棲息す）

七、猛禽類　鷹、鳶、鷲、梟鴟、鴟鴞、等（特徴は主として溫血動物を食とし、嘴は短くして上下互に嚙合ひ其尖端は極めて鋭く後肢も亦極めて鋭き爪を有す）

▲如斯く鳥は概して空氣を澤山呼吸しますから他の動物よりも體が溫かです。嗅ぐと、昧ふと、觸はる事の感覺は何れも遲鈍ですが、しき、あひるの樣なものは其嘴が柔かい皮で被れて居りますから觸覺丈けは非常に鋭敏です。

▲諸君、鳥には齒がありますか、有ると思はる、方は探して御覽なさい、齒は何んなな鳥にも生へては居りません、其代りに嘴といふものがあるのです。

▲以下八號室の鳥類をしらべて見ませう。

▲『がてう』――鷲と書く涉禽類、三十一年十二月小筆善太夫氏獻納のものを初め八羽。

▲『がん』――雁と書きます、エジプト雁、マガーラガン、カナダ雁、白雁、ほゝじろ雁、まがん、等凡そ三十四五羽も居ります。

▲『はくてう』――鵠、鶴の一種、二羽。

▲『さかつらひしくひ』――鴻、三羽。

▲『たんちやう』――丹頂、四羽。

▲『こうのとり』――鶴、二羽。

▲『ごゐさぎ』――水鶏、三羽。

▲『せぐろごゐ』ごゐさぎの類。三羽。

▲『しらさぎ』――鷺、一名こさぎともいふ。

▲『つかひばと』――傳書鳩、十六羽、主に伊太利の產、米國のものも五六羽あり、日本には居りません、普通の鳩と比ると大分大きい戰爭の時に使用されるのはこの鳩です。

▲『くじやくばと』――鴿、二羽。

▲『かひばと』――一名とばと、八羽。

▲『まがも』鳧、十八羽。

▲『かるかも』――夏鴨、五羽。

▲『あひる』鴨、五羽。

▲『きんぐろはじろ』――一羽。

▲『はしろかもの類』――一羽。

▲『ばりけん』――琉球の産、一番。

▲其外にもありますが、先づ重なものは右の通りで、その餌食は普通、稗、黍、菜葉、等で、『ごゐさぎ』、『せぐろこひ』、『しらさぎ』等は之に泥鰌を添へる、傳書鳩は主として黍を喰べて居ります。

第九號

『つるの一種』　一羽

▲これは亞弗利加から來たものゝ並の鶴よりは小さく、背部の翼は黑湖墨色、頰べたを赤くして居ります、最も奇態

な觀をして居るは鳥冠とも申すべき處に霜降色をして居る花火線香の樣なものがパッと開いて居ることです。

▲玄米、黍、菜葉の鉢り餌食、藁のはかま、米糠等を食べて居ります。

『きんけい』　鷄雌雄　九羽

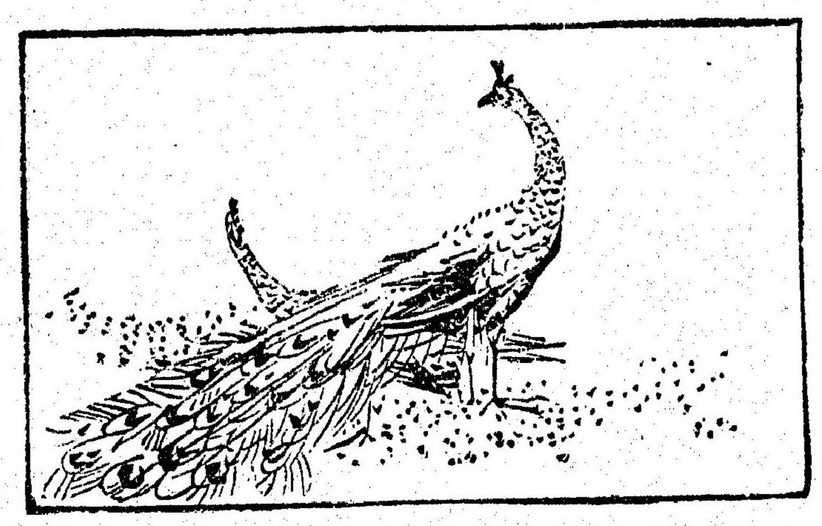
▲新宿の動物園に產したものを明治三十三年十二月に主獵局に引續き夫れからこゝに飼はれて居ります。

▲美しい、奇麗な鳥といつたら、この『きんけい』に超すものはありますまい、見るから目の覺める扮裝をして居ります。

▲大さは、鳩の大きなもの程、尾は鴿よりもズッと長い、先づ頭部の羽色が黄金色、襟首のところが金茶と黒のだんだら、脊中が黄色、腹の毛は喉の邊りから足趾の間際まで一面にからくれなゐ、夫れから脊中と尻尾の間の處が紫、尻尾は黒地に黄色のポッ〳〵ありて友仙染といふ見えです

『くじやく』　孔雀　雌雄　二羽

▲これも、『きんけい』に劣らない美しい鳥です、赤い色が餘りないので、『きんけい』よりも上品に見えます、夕日を背に受けて、其長い〳〵尻尾をある限り擴げた時の美しさたらわりません。



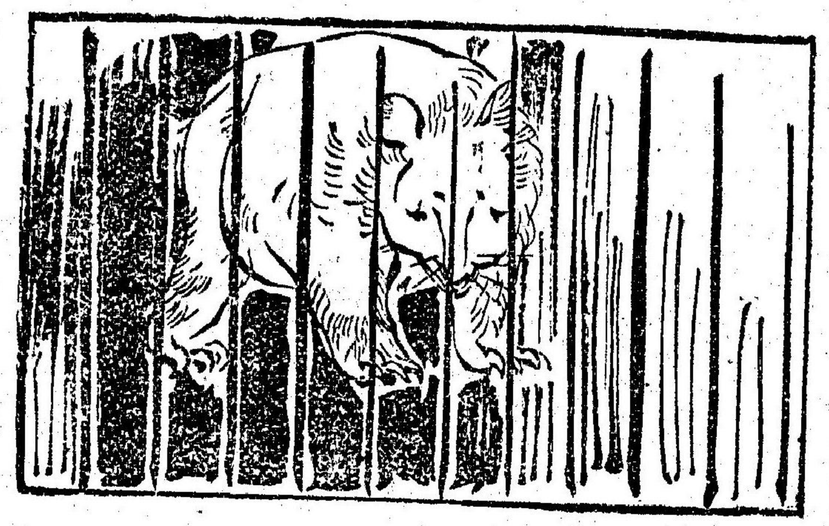
(くじやく)

▲この同じ部屋に『にはとり』が一番居ります、孔雀には馬の肉といなどなどが與へてあります。

第十號

くま　熊一頭

▲熊は亞細亞、亞米利加亞弗利加に住して居るもので、黒熊、灰色熊、白



熊、グリスリー熊など、いろ〳〵の種類があります。

▲こゝに居るのは黑熊です、主に亞米利加大陸の深林に棲んで居りますが又大西洋から太平洋岸、即はち日本にも棲み、又カロリナ地方から北氷洋の沿岸の方にも居ります

（まく）

▲この熊の皮はいろ〳〵の用に供せられ、英國では主に軍隊用に供せられて居て年々加奈陀の方から輸入さるゝ額が一萬五千枚位になつて居ります。

▲日本では熊の骨だとか、熊の掌だとかいつて藥屋さんが珍重して居るのも同じく此熊です。

▲尙は熊のことに就ては後でお話します。

第十一號

『すゞめ、めじろ』其他

▲こゝは小鳥ばかりの樂しい世界で、中央の棲木の枝から

枝へ、いろ〳〵さま〳〵に可愛い聲をして飛び囀て居る、ザット左の通りです。

▲じうしまつ……十姉妹　▲いんこ(せきせいと稱す)……鸚哥
▲ぶんてう……瑞紅鳥　▲じゃがたら雀
▲へきてう……碧鳥　▲のじこ
▲きんぱち　▲かなりや……時辰雀
▲ましこ　▲ちやうしやうばと
▲めじろ……繡眼兒　▲うづら……鶉
▲ほゝじろ……黄道眉　▲かはらひは
▲さうしてう……想思鳥　▲あとり……花雞

▲すゞめ……雀　▲べにすゞめ……紅雀
▲あをじ……蒿雀

第十二號

『いらくんてう』　吐綬雞　一羽

▲七面鳥の一種、小麥と菜ッぱを食べます。

『ほろくてう』　珠雞　二羽

▲光澤のある霜ふりの羽をいたゞく、圓々肥て居ますが、餘り姿の好い鳥ではありません。

『うこつけい』　烏骨雞　一羽

『にはとり』　家鶏　一羽

『やけい』　野鶏　一羽

『あねはづる』　四羽

▲『あねはづる』の眼玉は赤く羽は溝鼠色、『にはとり』は黒色でレグホーン種、やけいはカムサツカの産です。

▲この外に『フアラスジスト』といふ變な獸、これは濠洲に産するもの、いつも箱の上にあがつてお臀を人に見せて居る、足の短い洋犬ほどの大さのもの、夫れから『かひうさぎ』の大さのが、菜ッ葉に豆腐かすをムシャ〳〵喰つて居るのも茲です。

第十三號

▲こゝも鳥の世界です、主に水禽類が入れてあります。

▲『こばん』——江冠水鷄と書く利根川の産。

▲『まんぐろはじろ』——鷲の一種。

▲『をながかも』——尾の長い鳧。

▲『こかも』——刁鴨と書きます。

▲『ひとりかも』——丹毛鳧と書きます。

▲『をしどり』——鴛鴦八羽。

第十四號

▲獸と鳥と一緒に入れてある、鳥は鳥籠、獸は獸の檻に這入つて居る。

▲このはづく——鴞鵂、▲ぎんはと——白鳩、▲いかる——桑鳩、▲さんはと——錦鳩、▲てつはしだるまいんこ——達磨鸚哥、▲やまばと——山鳩、▲ぎんばと——臺灣產、▲じゆずかけばと——班鳩、英國產、▲ほかけこんせいいんこ——亞米利加西部ジャヴァの產、▲ひよとり——白頭鳥、▲ひばり——告天子、▲さうしてう——想思鳥、▲かけす——かしどり▲おほばたん——鵰鵡の事、支那の產、▲ねこ——猫、英國の產、黑猫、▲こばたん——濠洲メルボン動物園の產、▲をながさる——果然、臺灣產、三十四年堀見景正氏の獻納、豆腐かす、握飯、胡蘿蔔、ふかし芋を喰ふ、▲しろねずみ——二十日鼠、▲モルモット——澳太利の產、▲のねこ——野猫、臺灣產、▲かさゝさ——鵲。

第十五號

『うしうま』　一頭

▲これは明治二十六年四月廿日、鹿兒島縣大隅國熊毛郡種

子島村金濱牧場に產したものを、三十一年の十二月に子爵加納久宜氏から獻納したもの。

▲種子ケ島の特產で外にはありませんが、今日ではこの島にも絶えてこの動物園に居るもの丈け丈夫に殘つて居るのです、純粹の『うしうま』と種子ケ島內地產の馬とのあひの子で、同金濱村の田上七之助といふ人が飼育たのだそうです。

▲かたちは一寸、ミュールに似て居ります、大さも並の內地產よりは小さい方です。

「うま」　馬　二頭

▲『うま』は皆樣ご存じの如く、世界中何處へ行つても、殆んど居ない處はありません、茲に居るのは、單騎旅行で有名な福島少佐（今では少將）が歐洲の東部から、シベリヤを騎行された時、露國に得たる乘馬で、一頭は同國アルタイ山中ブフタルマンといふ溪に拓いた牧場に產したもので今年十五歲、これば色の白い方で亞爾泰號といひます。

▲今一つは同じくアルタイ山中のチンキス臺といふ處にキルギス人が開いた牧場から得たもので興安と名づけ、今年十六才になります。

▲二ッ共福島少佐を乘せてアルタイ山から漠北、蒙古の荒原を經て亞比利亞の嚴寒を凌ぎ、滿洲を經て浦汐斯德に達したもの、終始少佐と生死を共にした名譽の歴史を持つて居ります。

▲馬が他の獸と異つて居る所は第一に足です。ご覽の通り蹄もなければ、足指もなく、爪もなければ踵もありません、其代りに蹄といふものがある、此蹄も牛や羊の蹄と違つて二ッにも四ッにも分れて居ません全く一つです。

▲動物學者の說によりますと、馬も鹿や、駱駝や、牛や、羊など、同樣昔は偶蹄類であつたが、驅け走ることから自

然に發達せざる趾と非常に發達したものとを生じ今日では其發達したもの丶みが殘つて居るのだと申すことです。

▲即はち第一趾、第二趾、第三趾、第四趾と斯う偶蹄になつて居たものが中央の第三趾のみが非常に發達して他はなくなり第四趾が僅かに痕跡を殘して居るので、四趾共に存して居た證據には、七八年前亞米利加から掘出した馬の化石にはチャンと揃つて居るそうです。

▲それから尻尾も馬のは別で、肉もなければ皮もなく、骨は無論ない毛ばかりで出來上つて居ります、これも外の動物には全く類のないとです。

▲性質が勇ましくて、人に馴れ易く、友達同士の愛情が深く記憶のよい等は又た外の獸に勝て居ます、夫れですから獸のうちでも一番大事に人間に扱れて居ります。

▲若し世の中にこの馬と牛とがなかつたら何うでせう、牛乳も飲めなければ、バタも食はれない加之に牛肉はなくなる、荷車や、馬車などは丸で使ふことは出來なくなる、第一軍隊に大恐慌を起して砲車から輜重の仕組みまで全然變へなければ役に立たない樣になります、人間の仕事の凡そ五分の一はバツタリ機關が動かなくなつて仕舞ふでせう。

第十六號

『いぬ』　犬牝　一頭

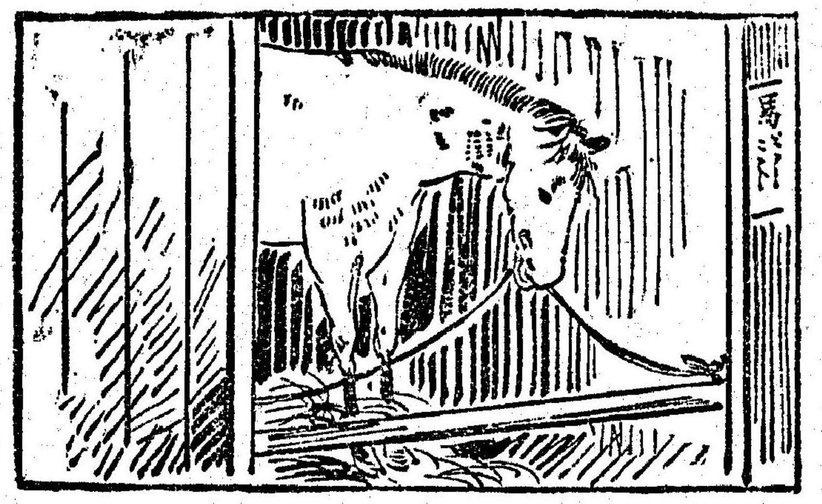
▲これは亞米利加ニューフアンドランド種で、三十三年五月西野某氏の獻納したもの、犬としては大きい、立派なものです。

『ゐのしゝ』　野猪　牝一頭

▲灰色、鹿兒島縣大島の產。

『うま』　一頭

▲この馬は精華號といひまして、是れも名譽ある歴史を持



て居ります、明治廿七八年の日清戰爭の時、故歩兵第十一旅團長陸軍少將大寺安純氏を乘せて旅順口、威海衛の戰爭に從事し、少將が名譽の戰死を遂げられた其前後の際まで、千軍萬馬の間を勇ましく馳駈して來たものです、其後暫らく第六師

(ま　う)

團に繫いでありましたものを、明治三十二年の八月に茨木同師團長から動物園に寄贈したのです。

※　※　※　※　※

▲今年十四才になります。

▲第十七、第十八、第十九號には何れも猿が這入つて居ります、第十九號のものが『をながざる』――果然、これは却て大きい奴です、夫れから第十七號第十八號には讃岐產の並の沐猴です。

▲沐猴が人間に亞での、智慧のある、利巧な高等の動物だと申すことは皆樣ご存じの通り、淺草や、川崎の大師さん

などへ行つてご覽なさい、お芋の切れ片を一錢か五厘か買つて拋つて遣ると、お辭義をしたり、まひ〳〵こをしたり、拍子をやつたり、失敬をしたりして皆樣を嬉がらせます、其物を喰ふ所、拾ふ所など實に利いたものです、猿芝居といふのもあれば輕業なども仕込樣によつては容易く遣ります。

▲さるの種類は、目釣爪類（きぬざる等をいひ南アフリカのみに產す）目廣鼻類（西半球の熱帶地方にのみ產す、はへざる、くもざるの類）目狹鼻類、狒々、さる、猩々、黑猩々の類）の三つです。

第二十號

『ひくひとり』　食火鶏　二羽

▲『ひくひとり』の事は前に出て居ります、是れはセルブス島マカッサー港から持歸つたもの、三十四年十月田中隆氏の寄贈。

『こうのとり』　鶴　二羽

▲鶴のことです、『だんちやう』の部に詳はしく出て居ります、是れは朝鮮の產、中村福太郎氏が納めたるものであります。

第二十一號

『だんちやう』　丹頂

▲この園にはずッとたんちやうが並んで居ります、日本産のものは、島津忠重君朝鮮産のものは、高橋勝七、長谷川金太郎、桑池景堯、淺田正文諸氏の獻納したもの。

第二十二號

『エミウ』　鴕鳥　三羽

▲駝鳥と同じく猛禽類に屬す、濠太利の産、三十二年十一月男爵川田龍吉氏の納めたるもの、長い頸を延ばして見物の頭や掌などをつゝく、餘り側に寄ると危險です。

第二十四號

『しか』　鹿　四頭

▲エミウの居る小屋の後ろの高い木柵のうちが鹿の部屋です、茲にとびはなれて居りますから、大抵の者は見逃して仕舞ふので、鹿は呑氣に跳ね廻はつたり、欠伸をしたりして閑散を樂しんで居ります。

▲大概、皇太子殿下から御下附になつたのです。

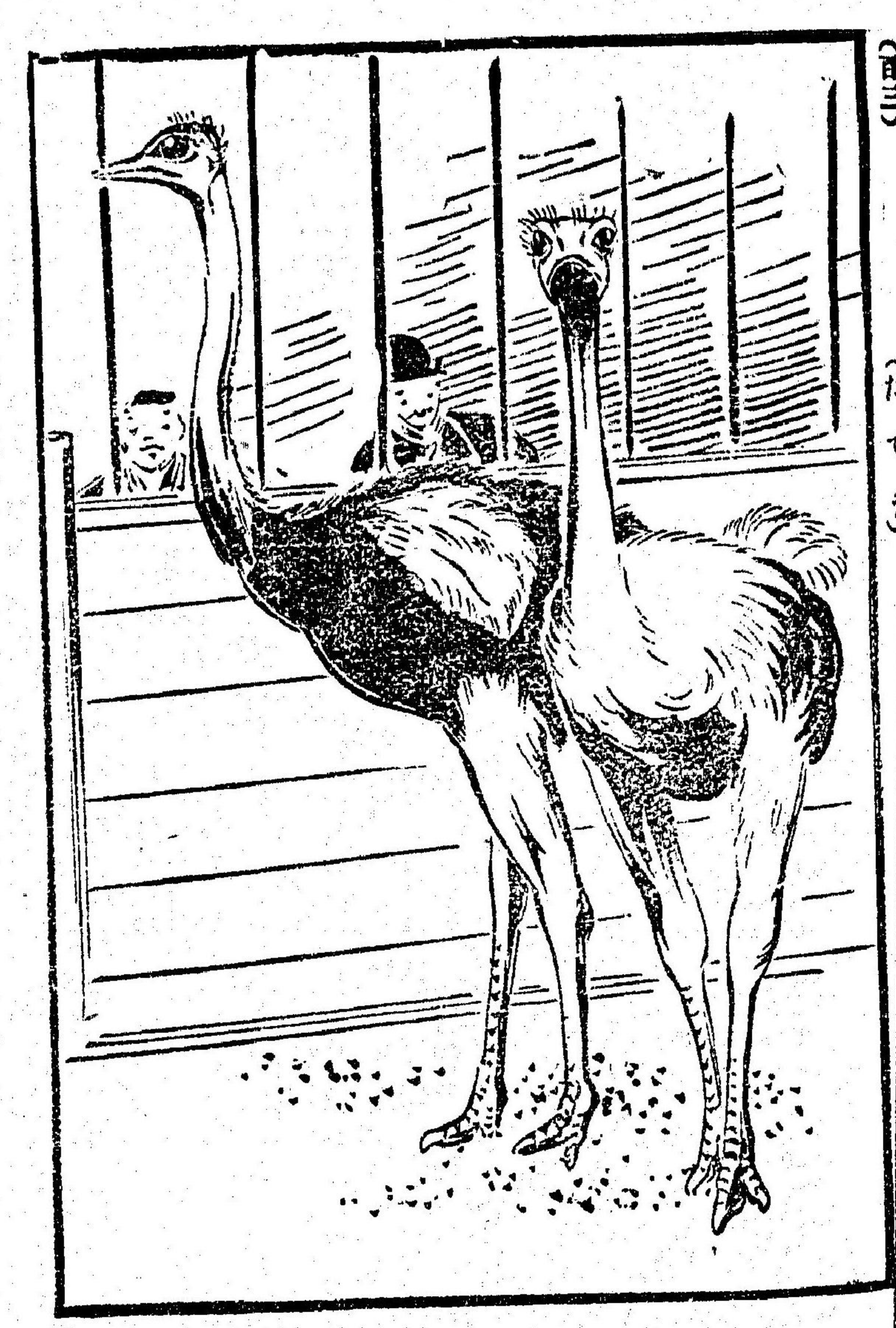
第二十五號

『だてう』　駝鳥　雌雄二羽

▲近ごろ動物園の呼びものになつて、皆様からわい〳〵云はれて居るのは、この第二十五號室です、獅子も、駝鳥も皆なこゝに居ります、先づ順を追ふて駝鳥の方からお話しませう。

▲駝鳥は先にもいつた通り猛禽類といつて最も恐ろしい性質を具へて居る物騒な鳥で、其容形もまことに物騒です。

▲長い頸を振り上げた處は、八九尺位の高はありませう、



其細長い頸には毛が丸でない、翼は小さくて飛び翔ける役には立ちませんが其代りに強い長い脛を持て居る。

▲其の脚の指が丁度駱駝の様に三本ぎりになつて居ますから、走ることの速さといつたらとても、馬などの比ではありません。

▲この脚で亞弗利加の方の砂漠の中を走り廻はつて彼方此方草のありそうな所を見付けて歩くのです。

▲砂漠といへばお存じの通り木もなければ、山もなく、川もなければ人の家もない、廣々した砂原ですから、餌食といつても容易に見付りません、ソコデ駝鳥の胸は砂でも泥

でも、時としては石でも消化する樣な、強い仕掛になつて居ります。

▲動物園でも折々、殼皮や瀬戸物の缺などを與へますが、目たゝく間に嘴を鳴らしてゴクリ〳〵甘さうに喰つて仕舞ふそうです。

▲こういふ嘴を持つて居るから、ウッカリ側に寄れません、突然頭の頂邊目がけてコッンと一突やられたが最後、頭の血が骨破微塵になる、腦味噌が出る、それぎり死んで仕舞ふといふ、油斷のならぬ鳥です。

▲其鳴き聲も却々凄まじい遠くから、聞くと丁度獅子のや

うであるから、砂漠を通る旅人などは能く聞違へて大騒をするそうです。

▲斯ういふ猛烈な性質を持て居ますが、一方には又可愛い所がないでもありません、と申しますは、卵子、自分の生んだ卵子を大事にする事で、生んだ卵子は砂の中に埋て、夫れが孵化までは毎日〳〵、晝の中は雌鳥、夜の間は雄鳥が寢ずの番をする、誰れかゞ來て其の卵を取るものがあれば、火の樣に怒つて誰れにでも向つて來る、獅子でも虎でも有無を云はせず、駝鳥のこの脚の一蹴で蹴殺されて仕舞ふのです。

▲駝鳥の卵子は目方にすれば五百目位はある、大きなのは家鷄の卵の廿五倍からあるそうです。

▲この駝鳥を生捕うといふには、倔强な馬に乘て遠くからバチ〳〵と銃の響をさせて其群を追驅け〳〵二日でも三日でも追驅け通して、歩けなくなるまで追ひ詰るのです。

▲追驅られた、駝鳥はとうぐ〳〵へたばつて草叢の中か何かへ首丈け突込むそうですが、之れが即はち頭かくして尻かくさずといふのでせう、茲で容易く生捕られて仕舞ふのです。

▲動物園で日々御馳走になつて居るのは、食パン一羽一日

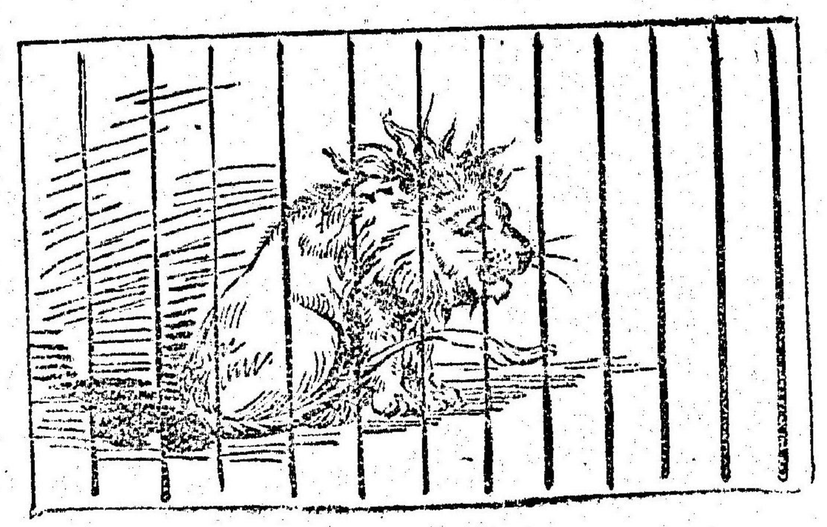
四斤、キャベッ（西洋菜）一貫目、小松菜一貫目、ふかし芋一貫目です。

▲今年の一月こゝに來たのです、固と〳〵熱帶地に住み慣れた動物ですから、駝鳥の居る所はたえずストーブが燒いて溫かにしてあります。

▲駝鳥と室を隣にして、『をながざる』が一疋あをうみかめ（綠毛龜）といふ珍らしい小笠原島の產が居ります。

『獅子』　しゝ　牡牝二頭

▲さて或る所に、一人の百性が居りました、何時もの樣に野良に出て働て居りますと、遙か向ふの森の方に只ならぬ



（し　し）

物音が聞える、何事だらうと何の氣もなく見て居ると、驚いたの、驚かんのといつてお話しになりません、大きな虎が物凄い齒をむき出して、うんうんいがみながら此方の方角にやつて來る。

▲一寸も其處を動くな、動いたら最後、一飛びに

飛付てぶッ崩して仕舞ふぞといふ恐ろしい權幕ですから、百性さん、逃げるに逃げられず、泣くに泣かれず、腰をぬかして目の玉を白黑して居りますと、虎は得たりと其側にやつて來て、

▲虎『オイ、百性さん、何もそうブル〳〵慄へるには及ばん、氣を落着て已れの云ふ事を聞きな、イヤといつたら其時は生命がないから能く考へて返事をしろ、お前の處に善く圓と肥つて居る牝牛が居るだらう、其牝牛を茲へ引張つて來い。

▲ヤレ〳〵自分の命を呉れろといふのではなかつた、是れで助つたといふ風で百性さんホット息をして『大將軍、あなたの命令に何で背きませう、直ぐに連れて來ますから、私しの生命丈けはお助け下さい』

▲といひますと、虎『ウム、ヨシ〳〵お前の生命は助けてやる、サッサと連れて來い、相違つたら有無をいはせず撲き殺すぞ』

▲百性さんも仕方がないから牝牛を連れに家へ歸りました家ではお神さんが、藁か何んかをサッサと片付けて居りましたが、亭主が眞ッ蒼な顏をして大周章に歸て來たのを見ると、いつもの癇癪聲を出し『お前さん今頃歸つて來て、

何をあはて丶居るのだよ、大方又た仕事がイヤになつたのだろう、善祿爺にも困つて仕舞ふ』といきなり吐鳴り付けた。

▲百性さんはそんな苦情を聞いて居る處ではない、實はコウ〳〵で牝牛を呉れる約束をして來たのだといひますと、お神さんは怒らないとか、火の樣になつて、『何んだ虎の畜生に大事な牝牛を呉れる、よくもそんな馬鹿な約束をされたものだ、牝牛を取られたか最後、明日からも乳も呑めなくなて菓子も出來きなくなる、お前さん初め皆んな干ぼしになるんだよ、腦病者め』、それは〳〵大變な權幕です。

▲百性さんは氣が氣でない、まで〳〵すると虎が怒つて益まで暴れ込むだ日には牝位ゐの騒ぎやアない、早く連れて行つて災難が逃をたいと思ふのだが、お神さんはプッ〳〵ものので相變らず吐鳴つて居る。

▲お神『仕方がない、サッサと野良へいつて、そういつてお置きよ、今に後から女房が連れてくるからと、そういつてお置き、……何んでもい丶からサッサとおしよ』といはれるので、百性さんは絶對絶命、又スゴ〳〵虎の處へ引つ歸して行きました。

▲虎『何をぐづ〳〵して居たのだ、牝牛は何うしたのだ、

何んだ、後から嬶が連れて來る、この野郎己れを欺したなッ』と今にも突懸からん樣子が見える、百性『決して欺しは致しません、もう十分間お待ち下さい、吃度連れて參ります』お神さんの來るのを何か今かと待つて居りますと。

▲漸ッと妙な足音が聞える、牝牛の叫び聲もする、だんだん近付くのを見ると牝牛に違ひないから虎も喉を鳴らしてやッとおあつらひが來たといふ風に舌打をして居ます。

▲だん〳〵近づいて來るのを見ると、今度は虎の血色が變はつて來た、何うも牛ばかりではない、何か牛に乘かゝつて居る、變なものだと百性も二度吃驚をしながら能く見守

て居ると、驚いた、驚いた、大なる獅子が前髪を振り亂して威丈け高に牛に乘つかゝて居るのだ。

▲今まで鬼をも取りひしかん元氣であつた虎も、この有樣を見ては驚かざるを得ません、尾を垂れ、舌を收めてブル〳〵慄ひながら、ソロ〳〵逃支度をして居る。

▲虎『コラ百姓、アレは何だ、何に、お前の目にも獅子と見えるか、獅子に違ひないが、畜生いま〳〵しい奴だ』とブツ〳〵こぼしながら一散走りに向ふの森を目がけて逃げ出した。

▲百性は虎の逃げたのも知らず、二度の驚きに夢か現のや

うに丸で感覺を失ふて仕舞ひました。

▲虎の彼方の森の奥深く全く逃げ匿れたのを見屆けて、牛に乘つた獅子は、ゆらりと下りて百性の側に立寄り氣付を呑ませて、覆面を脱いだ、見ると、お神さんだつたので百性さんはまた驚いた。

▲何んの事はない、越後獅子に代る樣な、獅子を頭から引かぶつて、お神さんが牝牛に乘つて來たので、甘ま〳〵と虎を威し付けたのです。

▲ソコデ獅子は虎よりも強い、其姿を見た丈けでも大概の獸は逃げ匿れて仕舞ふといふ事がお解りになつたでせう、

獅子は獸の中の大王だといふことを能く申しますが全く其通りです。

▲姿に戰き慄へる許りでない、大概の獸は獅子の鳴き聲を聞いた許りで身の毛を縮むるのです、深い山の中で崖か何かの上に立つて一聲呻らうものなら、物凄じい響が森から森、山から山に響き渡つて、五六里四方位も聞えるのです

▲こんなに強い獸ですか、其姿形ちも凛として誠に犯しがたい上品な氣高い風采を供へて居る、牝獅子には前髪がありませんが、口が緊つて目鼻がとゝない、優然として居る所は狹い檻の内に在つても自然と世界を呑むの氣象が現は

れて居ります。

▲全體獅子は舊世界に現れる動物ですから、亞弗利加の森アラビヤ、ヘルシヤ地方から印度の或部分に居る丈けで其他には見付りません茲に來て居るのはアフリカの產であります。

▲豫て獨逸ハンブルヒの動物園に注文して三年間同國動物園に飼養したものを本年一月二日に送り超したのです、牡は四才、牝は三才で、牡の身の丈けは五尺餘、高さは三尺襟の毛即はち前髮八寸、體量四十九貫目あります。

▲牝は牡に比して體量稍〻輕く、身の丈けも少し低い、何

れも朝は劇げしく運動し、午後は大抵眠り、夜は熟睡して居ます。

▲食事は一日一回（午後三時）で馬の肉を一頭に付十一斤つゝ喰つて居ります。

▲日中は餘り吼えざるも朝目の覺めたる時又折々は夜中口を結んで呻るそうです、其聲は二重の硝子障子を通して遠く園外まで聞えます。

▲こゝに來た當分は氣候に慣れず、場所慣をしませんから隨分不機嫌の容子も見えたそうですが、だん〴〵慣れて來て、今小し容子を見た上で、牝牡とも一緒に置く手筈にな

つて居ります。

▲序でにこの獅子が亞弗利加の内地で『人間を捕つて食ふ實話』をお話ししませう。

＊　＊　＊　＊

英國のエー、ピー、ロイドといふ人、中央アフリカ探險中トーローといふ或る部落に滯在して居りました、二三日すると茲の土人の酋長が其人の宿にやつて來て、『ツイ今しがた土人の妻が裏庭に出て仕事をして居る時、獅子に襲はれて森の中に攫はれ行つた、ドウカ其仇を打つて頂きたい』麼ういつて來ましたから、ロイド氏は二三人

の同行者に土人の案内を連れて、其逃げていつた森の中を彼方此方探しましたが、無慘にも攫はれた女の死體が食い殘されて熊笹の間に血みどろとなつて居る外には何にも見當らず、空しく引返しました、これから又二三日すると、麼ういふ勇ましい恐ろしい出來事に出遭はしました。

村の人が何かわい〳〵騒で居る模樣であるから、早速ロイド氏は宿から出で見ますと、十五六才になる屈强な一人の少年が自分の父の死骸、それは〳〵無慘な、腦味噌が出て、頬ぺたや、股や、お腹の肉が處ろ〴〵食ひ取ら

れた死體の側に立つて、何かしきりに村の衆に話して居る處でありました。

其少年の話によると、此日の晝過ぎから六七人一緒になつて、近所の森の附近へぶら〳〵出かけて小さな畝道を通りかゝつた時、大きな牝獅子が不意に現はれて、アッといふ間もなく忽ちこの少年の父を撲殺して森の裡に引攫らへて行つた、連れの者は大周章をして皆んな逃げてしまつが、自分の父を喰はれた少年のみは其處に立留まり持て居つた矛で突差の間に身構をして獅子の跡を追驅けて森の中深くへ身を躍らし曩の獅子が父の體軀をむし

や〳〵喰つてる處に來り、父の仇き思ひ知れとばかりに矛尖鋭どく突込もうとしたので、獅子も驚いた、いきなり身をかはせて、少年に飛びかゝつたが、天なるかな、此時少年の構へた矛尖に胸の中央を指され、自分の體軀の重みで遂に心臟を破ぶつて其處らを二三邊跳ね廻はつた儘物凄まじい叫び聲をしてドーと斃れてしまつた。

小年は不思議に少しも傷を受けない、獅子の死體には目も呉れず一散走りに父の死骸に抱き付き悲慘の出來事を泣き悲して居ると、牝獅子の悲鳴を聞き付けて今度は雄獅子が非常の勢ひで現はれて來た、此跫音を聞くより、

少年はそ層勇氣を増し、血のまだ生々しく滴つて居る矛をおつとり、

『サア來い、こゝ迄來い、貴樣も序でに刺殺してやるぞ』

と大聲に叫むだ、流石の獅子もこの少年の凄まじい勢に恐氣がさしたのか、牝獅子の死骸を其儘其處に見ながら、一散走りに逃げかくれて仕舞つた、少年は氣拔がしたといふ有樣で、やう〳〵父の死骸丈けを片付け今しがた村に戻つた、といふ話でありました、この話しを聞いた酋長は非常にこの少年の勇氣を賞めていろ〳〵の褒美をと

らせました。

このトーロートといふ處は斯ういふ風で今から七八年前までは一番獅子の多い所で、村の者は日中と雖も一人では決して外に出ない必らず五六人一隊になつて他行をするといふ風であつたそうです。

ロイド氏がこの村を辭して隣村のカイキロといふ所に行く途中にも獅子の所爲で喰ひ殘された人間の死體が三ツも四ツも山道の中央に横はつて居たそうです。

今日ではアフリカの土人も大抵鐵砲を持つ樣になりましたので獅子が人家近くを襲ふことは極く〳〵稀れだそう

です。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

第廿六號

『く　ま』　熊　二頭

▲並のものよりは小さい方、白と、黑と二頭居ります、越後の産、皇太子殿下より御下附。

『あかぐま』　熊

▲概稱して灰色熊ともいふ、主に歐洲の山地に棲ひも又北高緯度の地方から南はアルプス、ピレテス及び、又西比利

亞、堪索加、日本の北部、亞米利加の北部等にも産出します、これは天鹽國の産で二十六年九月に松岡省三氏の獻納したもの。

▲並のくまに比ぶれば體格も大きければ力も強いのです。

第廿七號

▲こゝに居るのもあかぐまです、右の園に居るのが牝で明治十七年九月獨逸人ヤンソン氏の獻納したもの北海道の産左は露國東シベリヤ堪索加の産、廿四年十二月寺見機一といふ人の獻納。

▲熊の類には大抵豆腐かす、飴かす、ふかし芋等が與へてあります。

第廿八號

▲同じく『熊』が二頭、小さい方は越中産、牡、十八年六月岩崎彌之助男の獻納したもの色は漆黑、大い方は朝鮮産、十八年十一月海軍省の寄贈、これは牡。

第二十九號

『ゐのしゝ』　野猪　二頭

▲一つは嚴島の産、華頂宮家より三十三年に寄贈されたもの、一つは土佐の産で二十九年に中山寛六郎、長森藤吉郎の二氏の獻納したるもの。

第三十號

『やぎ』　山羊　四頭

▲小笠原島の産、三十二年杉村作太郎氏の獻納。

第三十一號

『らくだ』　駱駝　二頭

▲何れもこの動物園で生れたもの、今年四才。

『うさぎうま』　鹿　一頭

▲即はち驢の事です、三十一年五月皇室より御下附。

第三十二號

『あぐま』　熊　二頭

▲最初の分はあかくまの内では極小さな奴です、三十三年六月皇太子殿下より御下附北海道の産。

▲次の比井四年十二月佃信夫氏の獻納、北海道の産です。

『ほくきよくぐま』　北極熊　一番

▲これは白熊ともいひます、彼の千古の雪をたゝず、氷山

が屏風の様に突兀として居る北極地方に住し晨には險はしい崖の上に攀ぢて、鳥の卵、雛ッ子等を求め、夕には深い海に這つて魚を攫る。

▲グリーンランドの土人は、皆なこの白熊の毛を着物にして居ります、先づ外套から股引、足袋、手袋の末にいたるまで皆この毛皮を用ひ、室の内には敷物ともなし、又た布團にも拵へるのです。

▲其拵らへ方は雪の中に十分其皮を晒らし置き、次に其脂肪を削りとり、再び之を嚴寒の中に晒らして之を揉みなめす時は皮の質が柔かになり、毛の色は一層白くなつて澤〻

して來るそうです。

▲この白熊の外に動物園にはありませんが、猛熊といふ種類の違つたものがありますが、これは主に米國のロッキー山に接で居ります。

＊　＊　＊　＊

▲これで動物園は一先づおしまひ、これから直ぐにお歸りにならうと、今一應見直しをなさろうと夫れは皆樣のお勝手です。

動物園案内　終

明治三十五年四月十日印刷
明治三十五年四月廿一日發行

東京市麹町區幸町一丁目五番地
編輯者　淺田彦一

東京市下谷區西黑門町廿三番地
發行者　永島爲次郎

東京市神田區雉子町三十四番地
印刷者　深山一郎

東京市下谷區西黑門町
發兌元　永樂堂

不許複製

◉大好評にて既に第八版發行◉

易學大家 從五位 高島嘉右衛門先生校閲 高弟門人 柄澤照覺先生著

易學大博士

全一冊 紙數二百五十頁 印刷鮮明 實價卅五錢 郵稅四錢

本書は高島先生の實傳並に伊藤伯全權大使奇談の占例、人の一代毎年毎月の運氣、一代日取吉凶、家相方位、適業、相性、又天禀の病氣に因て四季寒暖の注意又數日の病難者を直ちに治する法其他人事百般に關する開運法目錄百四十通り掲載天下無比の神書なり

大畑裕 男女一代 先生著

毎年吉凶獨占

全一冊 實價十錢 郵稅二錢

極て簡易に男女百八歳迄毎年の吉凶禍福が一目に分ります

發兌元 東京下谷西黒門町廿三番地 永樂堂

▲岡崎屋書店新刊書目▼

學生憤起錄 關貫米君著 三版 正價金貳拾錢 郵稅金四錢

自修論 再版 エデンバラ大學教授ブラッキー原著 日本永田留六郎先生譯述
原名 セルフカルチュアー

最新ベースボール術 十版 大日本體育會教授高橋忠次郎先生 依田直伊先生 小野泉太郎先生共編 定價金拾五錢 郵稅不要

和漢文學佳句類選 八版 關露香君編 定價金貳拾錢 郵稅不要
マストル、オブ、アーツ 陸軍大學教授 華族女學校教官山口造酒先生編纂

實用英和書簡文 六版增補 定價金五拾錢 郵稅不要
中學英文臨時增刊

和文英譯例題講義 三版 定價金拾五錢 郵稅不要

元木貞雄先生編
三版 英和日用文 定價金參拾錢 郵税不要
陸軍大學校教授、華族女學校教官、「マストル、オブ、アーツ」山口造酒先生編
八版 獨逸語獨脩 定價金貳拾五錢 郵税不要
華族女學校教官、陸軍大學校教授、「マストル、オブ、アーツ」山口造酒先生編
五版 佛蘭西語獨脩 定價金貳拾五錢 郵税不要
松岡馨先生著
再版 朝鮮語獨脩 定價金貳拾五錢 郵税不要
陸軍大學校教授、華族女學校教官、「マストル、オブ、アーツ」山口造酒先生編
三版 新編英吉利語獨修 定價金貳拾五錢 郵税不要
小柳津邦太先生編
再版 露西亞語獨脩 定價金貳拾五錢 郵税金四錢

東京市神田區雉子町
特電話本局百四十八番 岡崎屋書店

文陽堂新刊書目

現今社會交際案内
●北村東紅著
四六版全一冊 正價二十五錢 郵税四錢

現今社會の百事千態、硬なるもの柔なるもの、清と濁と、隱れたると陽れたるとに論なく、材料豐富、觀察鋭利、興味津々として盡きざるは是れ」

兵營夜話 朧月夜
●橘亭主人著●梶田半古畫
四六版全一冊 正價二十五錢 郵税四錢

曾て叔父の世に在りし時予に許せし意中の人の予を慕ふこ

と限りなきに現在の榮華に迷へる亡き叔父の妻は予の一書生一兵卒たるを卑みこれを未來の參謀長として敬はるゝ武光中尉に嫁せしめんとす讀者よ予が此背信奸佞侮蔑に對する怨恨如何許りと思ひ給ふぞ予は今朧月夜に彷徨ひて泣き怒り悶へつゝあるなり

●前島密先生序●椋木蓮花著

言文一致應用文範

全一冊
正價拾五錢
郵稅二錢

いろは四十八文字の書けるものは誰にても思ふまゝを簡明に文につゞるとが出來其上自然口語を完全にするのが本書の一大目的であるから學生の練修書として獨學者の自修書として至極好適のものであります

谷口政德先生編纂

日本廻遊修學旅行

全一冊
價廿五錢
郵稅四錢

「中央新聞評」 本書は全國地理を紀行的に記述したる者にして名所舊蹟には史上の逸事並に古人の文章詩歌を附し且つ或事物に對しては理科を應用して解說を下したれば旅行の枝折となり亦燈下の友たらん

讀賣新聞社編

家庭の教育

全一冊
價五拾錢
郵稅六錢

「東京日々新聞評」 上は內親王御教育の御事より下は朝野名流の家庭の實狀及家庭教育に關する理想觀念等に涉り往々にして腐敗せる家庭の慘狀を描き頗る意を教訓に用ふるものあり能く我邦家庭教育の現狀を描出し讀者をして其長を取り其短を捨て之に因て自家の家庭教育に對し參考に資するを得せしむべし

讀賣新聞社編

茶話

全價三拾一錢冊
郵稅四錢

茶はなしは茶話なり本書は讀賣紙上江湖の大喝采を博せしものを集めて一篇としたるもの敢て天下の大計を談せんとするものにあらず唯當代名士の逸事を知り笑話を聞き隱し藝を見んと欲するの人須く來つて此茶話に耳を假さざる可からず殊に其輕妙の筆路は言文一致界に一體を爲しゝもの更に再三の精讀を乞ふ

橋亭主人著

兵營百話

全價拾五錢冊
郵稅二錢

發行所　東京市神田區美土代町三ノ二番地　文陽堂書店

323
18

永樂□印

057541-000-6

特65-216

動物園案内　ー動物児訓ー

浅田　彦一／著

M35

CAR-0122